

TZ 〈ほんの窓〉

第 18 号 (2008. 11. 1) 一橋大学附属図書館 [高本善四郎氏助成図書コーナー](#) 「本の紹介」 班

「天工開物」と云う漢籍

今回は、中国の古い書物である漢籍から、当時としては優れた技術解説書といわれている「天工開物」について紹介する。漢籍といえば、大抵は難しく読めそうにない漢字がそのまま書名になっており、馴染みにくいものであるが、「天工開物」は、意味はわからないものの、そのまま「てんこうかいぶつ」と読めばよい。

「天工開物」とは 中国、明の時代 (1368-1644)、江西省出身の [宋應星](#)¹ (1587年~1665年頃) が、明代末期の崇禎 10 年 (1637) 頃に著した産業技術に関する解説書である。書名の意味について、[三枝博音](#)² (1892~1963) は「天工」とは人工に対する自然力を意味し、「開物」とは、この自然力を利用する人工で「開発」や「開業」と同様に新たに物を開くと解釈している。

「天工開物」が優れている点は、明時代において、洋の東西を問わず技術書の発行が極めて少ない中で、当時の技術部門を網羅的に記載している点であり、産業技術を、穀類・衣服・染色・調製・製塩・製糖・製陶・鑄造・舟車・鍛造・焙焼・製油・製紙・製練・兵器・朱墨・醸造・珠玉の 18 部門に分け、農業、漁業をはじめ、中国の伝統産業・技術をほぼすべて解説している。

また、[挿絵](#)が素晴らしく、それぞれの製造工程を手ぎわよく、簡潔に描いている。読み物としても興味深い。挿絵を眺めるだけでも、面白く一読の価値はある。



ポピュラーな漢籍 この「天工開物」は、内容的には優れた技術解説書であるが、書物としては特に珍しいものではない。少し漢籍を [所蔵している図書館](#) ならば概ね所蔵しており、[平凡社東洋文庫の『天工開物』\(1969\)](#) にも収録されている。勿論、本学でも所蔵しているし (p. 4: [所蔵リスト参照](#)) また、九州大学から [全文のデジタル画像](#) も公開されている。³



明時代の技術解説書でありながら、その内容は現在においても高く評価され、良く引用されるほか、日本人には馴染みの薄い漢籍でありながら、試しにGoogleウェブで [「天工開物」と入れれば 42,000 件以上](#) ([「天工开物」と入れれば 147,000 件以上](#)) ヒットするくらい、極めてポピュラーな漢籍といえる。

日本では 元禄時代の [貝原益軒](#) の [『花譜』](#) (1694) や [『大和本草』](#) (1708) の考用書目に「天工開物」が挙げられているので、この頃には既に日本に入っていたものと考えられている。そのほか、[新井白石](#) の [『本朝軍器考』](#) (1736) や [平賀源内](#) の [『物類品鑑』](#) (1763) などにも引用されている。

また、明和 8 年 (1771) には、大坂の菅生堂から、当時のコレクターであった [木村兼葎堂](#)⁴ (1736-1802) が所蔵していたものを底本とし、訓点、送り仮名付きの 9 分冊の和刻本『天工開物』(1771) ([以降「菅生堂本」という](#)) も刊行され (文政 13 年 (1830)、天保 4 年 (1833) にも重版を刊行)、当時からポピュラーな漢籍として日本ではそれなりに流通した書物となっていたと推測される。



中国では 当の中国では、『古今圖書集成』（1725）や『授時通考』（1742）など2～3の書物に引用されているものの、清朝（1644－1912）中頃から忘れ去られ、『四庫全書總目提要』⁵（1782）には既に書名の記載がなく、中華民国初頃（1910年代）には中国国内で探索される状態にあった。

この状況は、中国人留学生章鴻釗⁶が上野の**帝国図書館**でこの和刻本の**菅生堂本**を発見後一変する。



「天工開物」（武進陶氏涉園，1929）重印

彼が1926年**菅生堂本**を入手し中国に持ち帰った翌年、これを底本として一部挿絵を差替えた複製本3分冊『天工開物』（武進陶氏涉園，1927）が刊行され、1930年には、**菅生堂本**から訓点、送り仮名を抜いた複製本9分冊『天工開物』（上海華通書局，1930）も刊行されたというから面白い。

和刻本の**菅生堂本**が中国に逆輸入という形で、それを底本とした複製本が作られ、その後も、3分冊『天工開物』（上海商務印書館，1933）、洋装本『天工開物』（上海世界書局，1936）と慌しく刊行されている。漢籍としては珍しいケースである。

いずれにしても、和刻本の**菅生堂本**の刊行がなければ、中国での流通はなかったであろうし、現在のように多くの図書館に所蔵されるまで至っていなかったであろう。

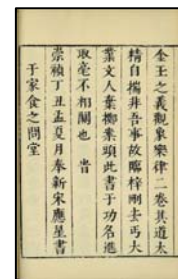
原本が数点！ しかも2種類？ 「漢籍」として極めてポピュラーな書物で、しかも現在多くの図書館に所蔵されているながら、これらはすべて後の世の複製本、あるいは復刻本、また挿絵の改訂本であり、実はその原本（明時代の刊本）はその存在が非常に少なく、世界で数点しか確認されていない。

しかも、明時代の刊本には**2種類発見**されているから、話は更にややこしい。

1種類は、先の**菅生堂本**の原本に当たる版（木村兼葭堂が所蔵していた版）で、これは**6分冊**で、序文は「天工開物巻序」で始まり、終わりは「崇禎丁丑孟夏月奉新宋應星書于家食之間堂」と崇禎10年（1637）を示す干支が入っている。

現在、[中国国家図書館](#)、[パリ国立図書館](#)での所蔵が確認されている。国内では東京の[\(岩崎家\) 静嘉堂文庫](#)のみに所蔵されている。（以降「**静嘉堂本**」という）

三枝博音は、**菅生堂本**の誤字から、この**静嘉堂本**これこそが、木村兼葭堂が所蔵していたそのものではないかと説いている。



序文（北京図書館所蔵本から）中華書局，1959影印

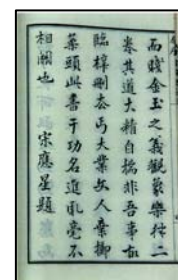


もう1種類は、もと水戸の[\(徳川家\) 影考館文庫](#)に所蔵されていたもので、（以降「**影考館本**」という）こちらは**3分冊**で、序文は筆跡を示す文字で「天工開物序」で始まり、序文の終わりは、「宋應星題」となっている。

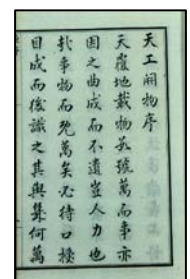
残念なことに**影考館本**は、戦争で焼失し現存しない。

しかし、三枝博音が焼失する以前の**影考館本**から何枚か写真を撮り、この両方の比較研究を行ないその相違点を発表している。『天工開物』（三枝博音解説，十一組出版部，1943）にに掲載されている。

また、東京の[\(前田家\) 尊経閣文庫](#)にも所蔵されていたようであるが、これも今は存在しない。（先の複製本3分冊『天工開物』（武進陶氏涉園，1927）は、**菅生堂本**のほかに、尊経閣文庫所蔵の『天工開物』も参考にしたと記されており、その序文のみ複製している。）



序文（尊経閣文庫所蔵本から）武進陶氏涉園，1927影印



どちらが先か、偽物か？

研究者により、静嘉堂本も、影考館本も共に明版とされ、内容的にも同一の構想から生まれ、共に著者の宋應星のものに間違いはないと判断されているが、印刷時の版木が違う。版木が異なるので、同じ文章ではあるが、いくつか文字が異なるほか、特に挿絵においても、同じ図柄でありながら相違している。

何故同時代に、しかも、明代末期の恐らく非常に近い間に別の版が存在するのか、通常は版木を彫り直すことは考えにくいですが、何らかの事情で版元、あるいは版木を変える事情が生じたのか、それともどちらかが偽版であるのか、仔細は不明である。

また、どちらが先に刊行されたのか、これも現時点では真偽は定かではない（影考館本が偽版、あるいは第2版とする説もある）が、とにかく同時期に2種類が刊行された。それらの研究は『天工開物の研究』（藪内清編，恒星社厚生閣，1953）、『天工開物校注及研究』（潘吉星著，巴蜀書社，1989）に掲載されている。



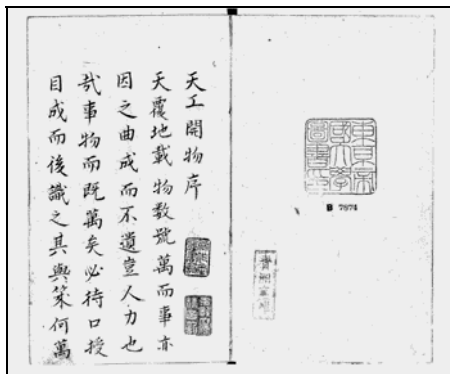
「天工開物」の進化

2種類のうち、東洋文庫の「天工開物」や現在多くの図書館で所蔵されている「天工開物」は概ねこの静嘉堂本系の菅生堂本を底本とする複製本であるが、しかしながら、その後の中国における複製本には、本文はそのまま、挿絵のいくつかをより詳細なものに差し替え、あるいは追加をして出版されるものが見られる。

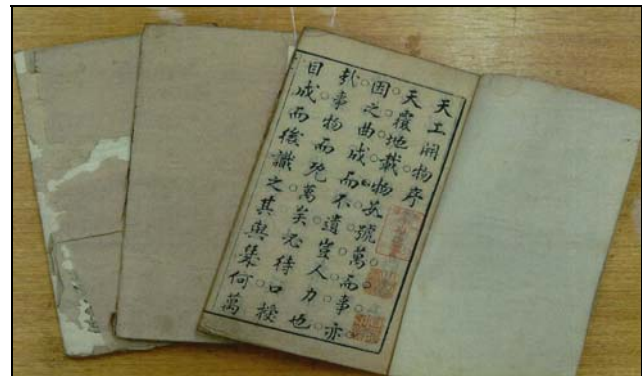
影考館本は版木は違うが図柄はほぼ同じであったのに対し、これらは図柄自体が既に原本とは異なっており、また新たな挿絵が加わることで、本がより進化しているように思える。しかし、それは他方で原型の喪失ということになる。

もう1種類の影考館本系の流れを汲むものは、大阪の（武田家）杏雨書屋、京都の（近衛家）陽明文庫、東京大学附属図書館などでその写本の存在が確認されているのみで、（中国国家図書館での所蔵の噂はあるが、確認されていない。）明時代の刊本は影考館本の焼失後、海外でも幻のまま発見されていないようであるが、一橋大学附属図書館所蔵本はどのようなのであろうか。

（情報推進課 豊田裕昭）



江戸 写本「天工開物」東京大学附属図書館所蔵



明 刊本「天工開物」一橋大学附属図書館所蔵

【参考文献】

- ① 三枝博音編：「天工開物」，十一組出版部，1943
- ② 藪内 清編：「天工開物の研究」，恒星社厚生閣，1953
- ③ 藪内清訳注：「天工開物」（東洋文庫130），平凡社，1969
- ④ 田中正俊著：ある技術書の軌跡；「天工開物」の三枝博音解説に導かれて，歴史評論，350，1979.6，p146~151
- ⑤ 橋本敬造著：「天工開物」；明代の産業技術の百科全書，月刊しにか，7(12)，1996.12，p54~59

【注】

1. 宋應星（そう おうせい）：奉新県の出身。万暦43年（1615年）に科挙の郷試に合格し、その後は地方役人などを歴任した。
2. 三枝博音（さいぐさ ひろと）：広島県山県郡出身。哲学、科学史、技術史の研究者。日本科学史学会会長や横浜市立大学学長などを歴任した。
3. 九州大学総合研究博物館 デジタルアーカイブ <http://record.museum.kyushu-u.ac.jp/tenko/tenko/>
4. 木村兼葎堂（きむら けんかどう）：大坂北堀江瓶橋北詰の商家の長子。書画・書籍・骨董・動植物標本のコレクター。膨大な蔵書は昌平坂学問所（現在は内閣文庫）に収められたというが、かなり流失している。大阪の（武田家）杏雨書屋所蔵の「天工開物」の写本は木村兼葎堂の旧蔵書である。
5. 四庫全書総目提要（しこぜんしょそうもくていよう）：春秋戦国時代から清朝初期に至る文献（10,254種、172,860巻）の解題目録である。
6. 章鴻釗（しょう こうしょう）：中国からの留学生。地質学を学ぶ。著書に「石雅」、「支那地質学発展史」、「中国地質学発展小史」などがある。

<関連書籍 所蔵リスト>

天工開物 / (明)宋應星著 上海 : 商務印書館, 1933.12

[Ydle:9 118337108W](#)

天工開物 / 宋應星原著 ; 三枝博音解説 東京 : 十一組出版部, 1943.9

明和 8 年刊 大坂 菅生堂板行の複製本

[Ydle:3A 118337107V](#)

天工開物の研究 / 藪内清編 東京 : 恒星社厚生閣, 1953.9 (京都大學人文科學研究所研究報告)

[Sc:350 118007921T](#)

天工開物 / 宋應星著 ; 中華書局上海編輯所編輯 北京 : 中華書局, 1959.6-(中國古代科技圖錄叢編 ; 初集 1)

明崇禎 10 年刊本の影印本

[卷上 Yde:29:上 118339079+](#) ; [卷中 Yde:29:中 118339080X](#) ; [卷下 Yde:29:下 118035803T](#)

天工開物 / 宋應星撰 ; 藪内清訳注 東京 : 平凡社, 1969.1 (東洋文庫 ; 130)

[0800:12:130 115326029T](#)

技術の歴史 / 三枝博音著 東京 : 中央公論社, 1973

[OAe:96 1:118033507S ; 2:118033508T](#)

Tien-kung-kai-wu = Exploitation of the work of nature : Chinese agriculture and technology [i.e. technology] in the XVII century / by Sung Ying-sing = 天工開物 / Taipei, Taiwan, Republic of China : China Academy, c1980

[5000:170 120605386V](#)

Chinese technology in the seventeenth century / Sung Ying-hsing ; translated from the Chinese and annotated by E-tu Zen Sun and Shiou-chuan Sun. Mineola, N.Y. : Dover Publications, 1997

[5000:172 120605574U](#)

天工開物 : 中國古代科技文物展 / 香港歷史博物館編製 [香港] : 香港臨時市政局, 1998.9

[5000:806 110612057N](#)

天工開物 / 林燾祿輯 板橋 : 稻鄉出版社, 2004.3 (明辭釋義輯録 / 林燾祿輯) -- : [平装]

[5000:783 110611620I](#)

天工開物 / (明) 宋應星原著 ; 潘吉星譯注 台北 : 台灣古籍出版, 2004.4 (中國古籍大觀)

[5000:782 110611621J](#)

天工開物 / 宋應星著 [1637]

[貴重資料室/Ydle:3](#)

天工開物 / 宋應星著 [中華民國] : [武進陶氏涉園], [1929]卷上;卷中;卷下

明和 8 年刊 大坂 河内屋茂八刊の重印本 ; 跋 民国 17 年 丁文江

[土屋文庫/卷上 II:171:上 118155096-](#) ; [卷中 II:171:中 118155097.](#) ; [卷下 II:171:下 118155098](#)

天工開物 / (明)宋應星著 臺北 : 中華叢書委員會, 1955.7 (中華叢書)

武進陶氏涉園 重印本の景印本

[村松文庫/Ye:30 118337109X](#)